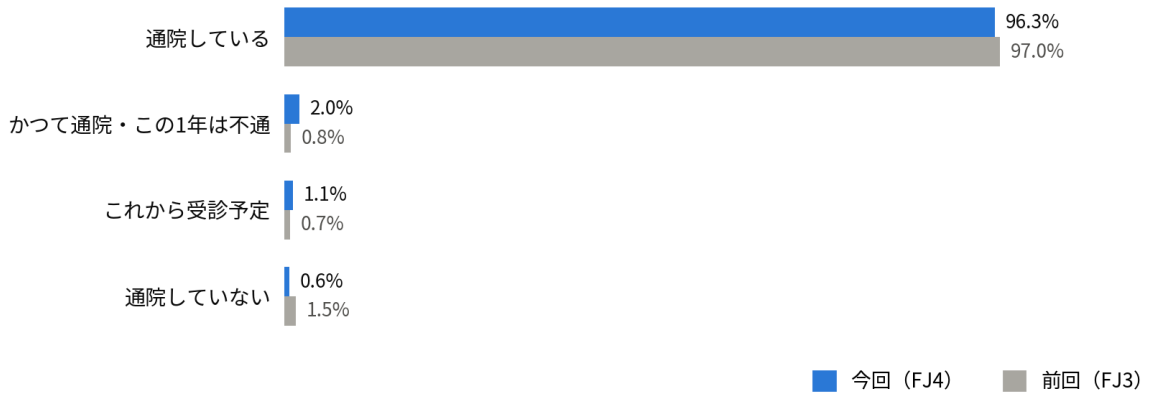
3. 通院

■通院状況

この 1 年間に HIV 感染症で定期的に通院しているかを尋ねたところ、96.3%（780 人）が「通院している」と回答しました。前回調査（FJ3）の 97.0%（881 人）とほぼ同水準であり、HIV 陽性者のほぼ全員が継続的に医療機関を受診できている状況が続いています。

通院していない方の内訳は、「かつて通院していたが今年は通院していない」が 2.0%（16 人）、「通院していない」が 0.6%（5 人）、「これから受診予定」が 1.1%（9 人）でした。

図 3-1　通院状況



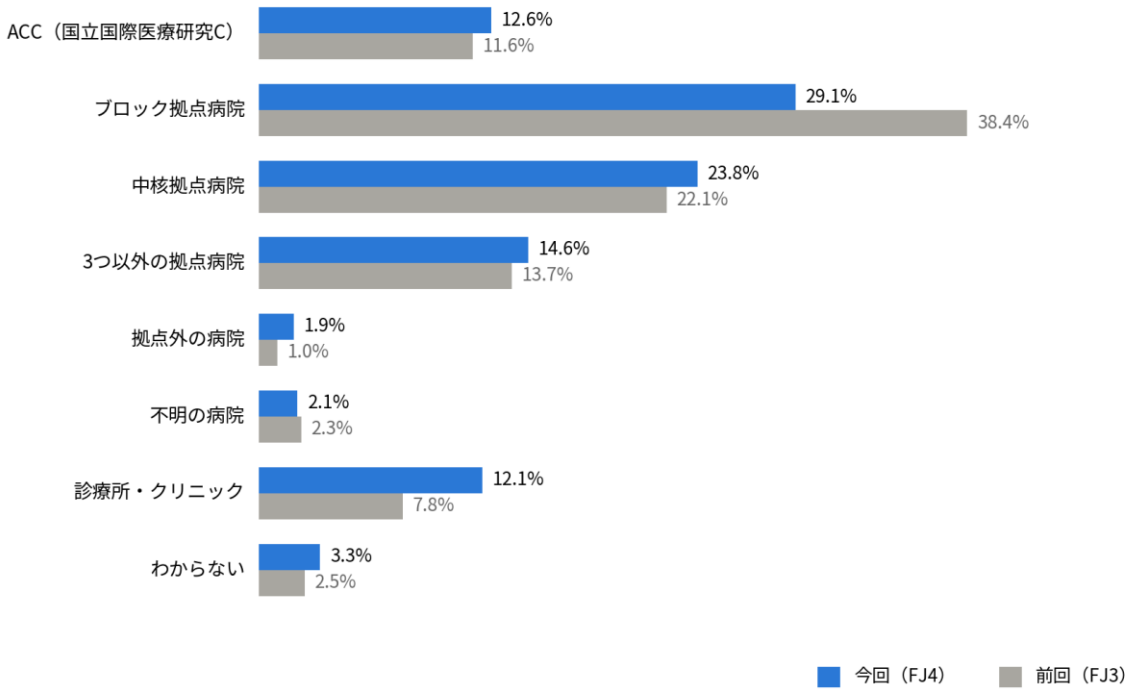
FJ4: N=810（今回・第 4 回）　FJ3: N=908（前回・第 3 回）

■受診している医療機関

通院中の 780 人に、主に受診している HIV 治療の医療機関を尋ねました。最も多いのは「ブロック拠点病院」で 29.1%（227 人）でしたが、前回 FJ3 の 38.4%（338 人）から約 9 ポイント大幅に減少しています。

一方で増加傾向にあるのが「診療所・クリニック」で、今回 12.1%（94 人）と、前回の 7.8%（69 人）から 4.3 ポイント増加しました。2 位は「中核拠点病院」23.8%（186 人）、3 位は「3 つ以外の拠点病院」14.6%（114 人）、4 位は「ACC（国立国際医療研究センター）」12.6%（98 人）です。拠点病院への集中が緩和され、診療所やクリニックへの分散が進んでいることがうかがえます。

図 3-2　受診している医療機関



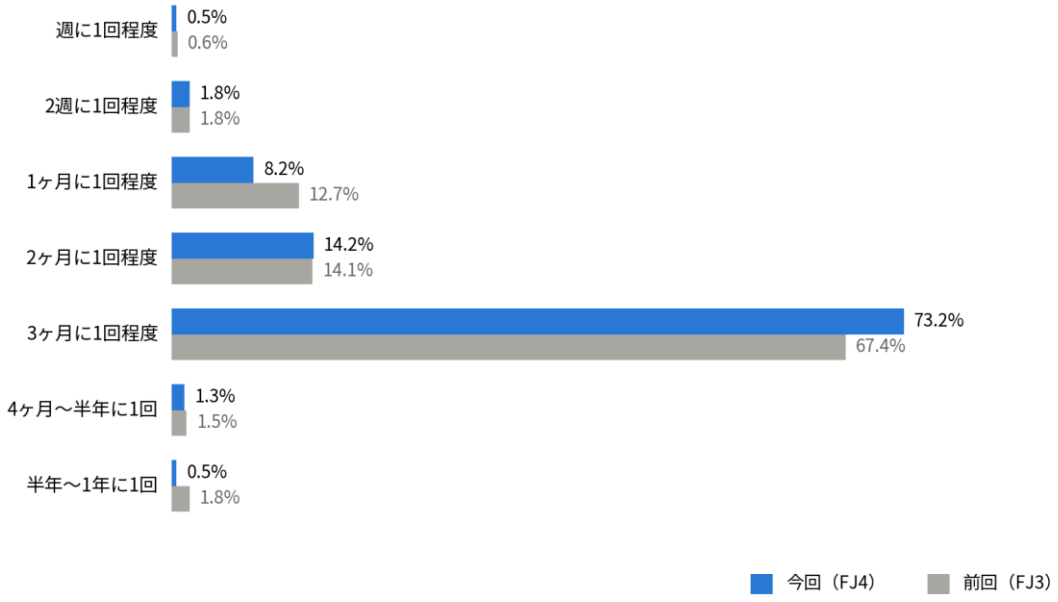
FJ4：N=780（通院中の方）　FJ3：N=881

■通院頻度・通院時間

通院頻度

「3 ヶ月に 1 回程度」が最多で 73.2%（571 人）でした。前回 FJ3 の 67.4%（594 人）からさらに増加しており、通院間隔が延びる傾向が続いています。次いで「2 ヶ月に 1 回程度」14.2%（111 人）、「1 ヶ月に 1 回程度」8.2%（64 人）です。治療の安定化や薬の処方期間延長により、多くの方が 3 ヶ月ごとの通院で管理できるようになってきていることがわかります。

図 3-3-1　通院頻度



FJ4：N=780（通院中の方）　FJ3：N=881

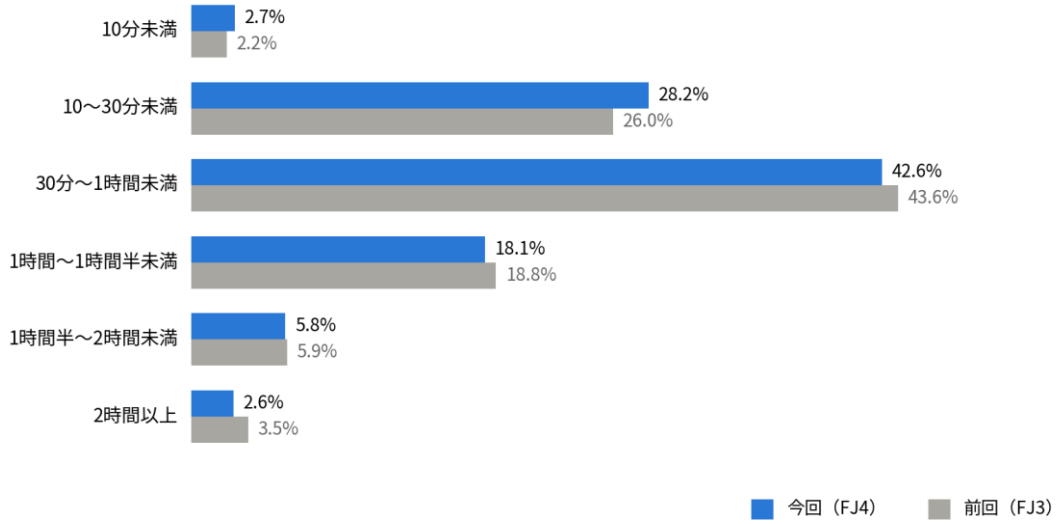
通院にかかる時間（片道）

「30 分～1 時間未満」が最多で 42.6%（332 人）でした。前回の 43.6%（384 人）とほぼ同水準です。「10～30 分未満」28.2%（220 人）と「10 分未満」2.7%（21 人）を合わせると、片道 30 分未満の方は約 31%です。

一方、片道 1 時間以上かかる方は 26.4%（206 人）で、前回の 28.3%（249 人）からやや減少しました。1 時間以上かけて通院する理由（N=206）としては、「HIV 治療で最初に行った医療機関だから」が 44.7%で最多、次いで「HIV 診療の専門性が高いから」

36.4%、「主治医が丁寧に対応してくれるから」34.0%でした。

図 3-3-2　通院時間

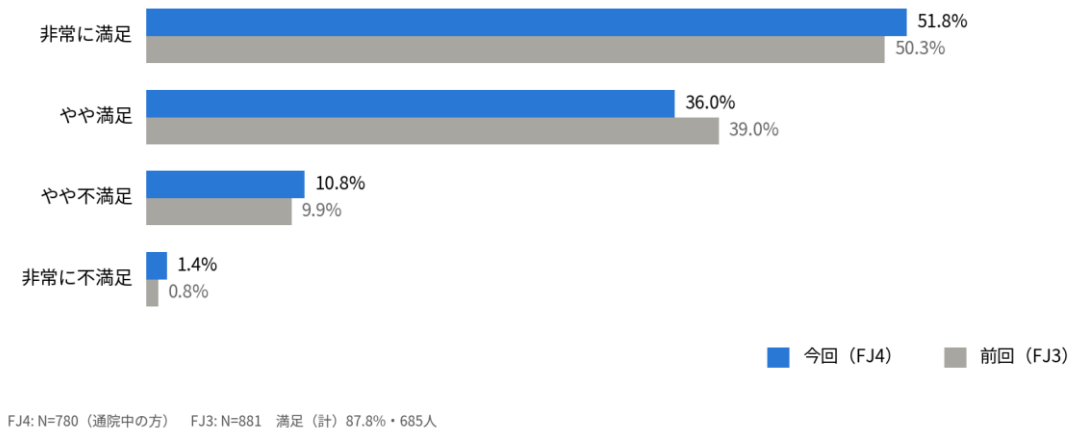


FJ4：N=780（通院中の方）　FJ3：N=881

■医療機関の満足度

通院している医療機関への満足度は、「非常に満足」51.8%（404 人）、「やや満足」36.0%（281 人）で、合わせて 87.8%（685 人）が満足していると回答しました。前回 FJ3 の約 89%とほぼ同水準です。一方、「やや不満足」10.8%（84 人）、「非常に不満足」1.4%（11 人）でした。

図 3-4　医療機関の満足度



FJ4: N=780（通院中の方）　FJ3: N=881　満足（計）87.8%・685 人

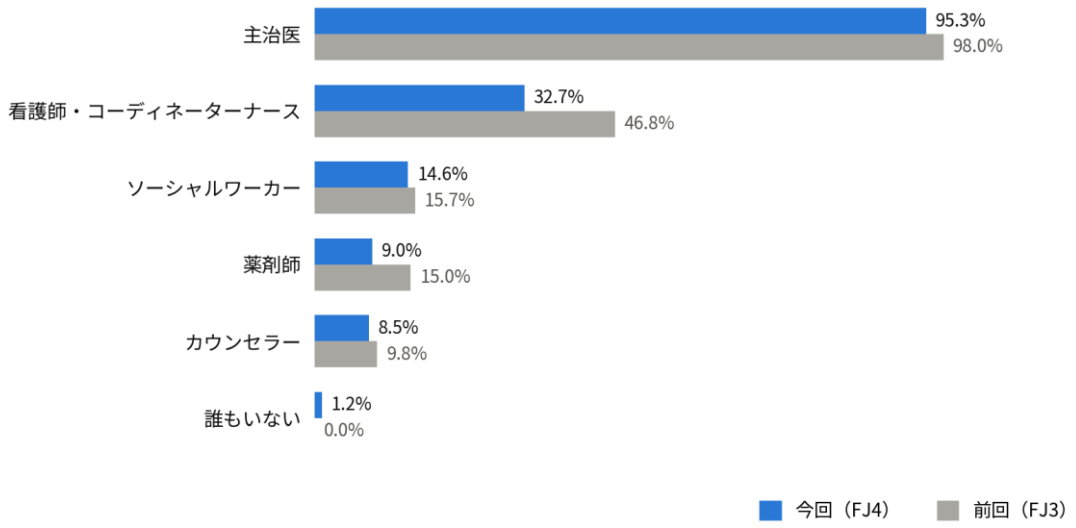
自由記述では、「主治医が親身に話を聞いてくれる」「スタッフとの信頼関係がある」「他科との連携が取れている」といった満足の声が多く聞かれた一方、「待ち時間が長い」「診察時間が短い」「看護師やカウンセラーとの相談機会が減った」といった課題も見られます。

■医療スタッフとのコミュニケーション

通院時に相談をする医療スタッフ

「主治医」が最多で 95.3%（743 人）でした。前回 FJ3 の 98.0%（863 人）からやや減少しています。注目すべき変化は「看護師・コーディネーターナース」で、今回 32.7%（255 人）と、前回の 46.8%（412 人）から約 14 ポイント大幅に減少しました。「薬剤師」も 9.0%（70 人）と前回の 15.0%（132 人）から減少し、「ソーシャルワーカー」14.6%（114 人）は前回の 15.7%（138 人）とほぼ同水準です。主治医以外の医療スタッフへの相談が全体的に減少しており、チーム医療の活用状況に変化が生じていることがわかります。

図 3-5-1　通院時に相談をする医療スタッフ

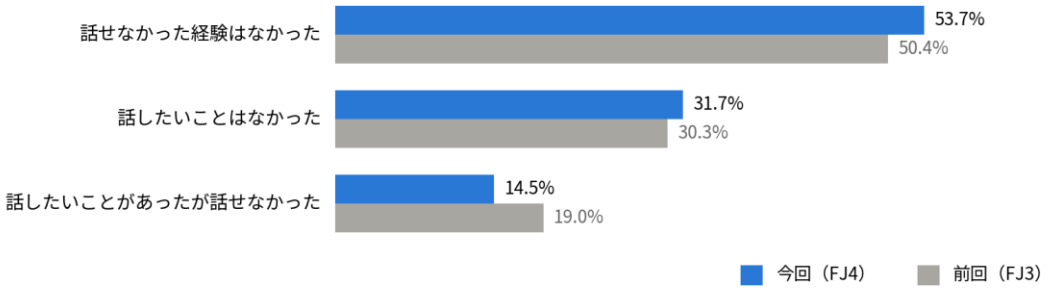


FJ4：N=780（通院中の方）　FJ3：N=881　複数回答

話したいことがあったが話せなかった経験

「話したいことがあったが話せなかった経験があった」は 14.5%（113 人）で、前回 FJ3 の 19.0%（167 人）から 4.5 ポイント減少しました。「話したいことはなかった」は 31.7%（247 人、前回 30.3%から増加）、「話せなかった経験はなかった」は 53.7%（419 人、前回 50.4%から増加）です。話せなかった経験が減少している一方、「話したいことがなかった」方も増えており、通院が定型的なルーティン化してきている可能性もあります。

図 3-5-2　話したいことがあったが話せなかった経験

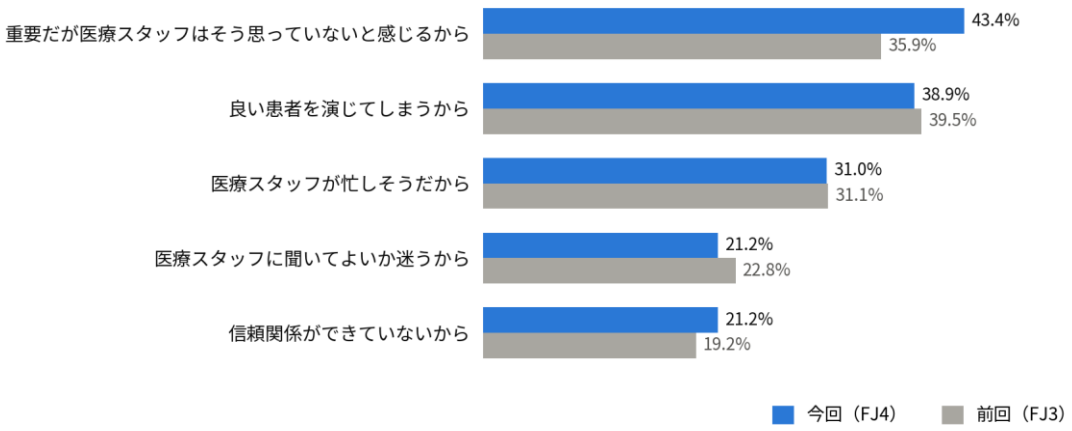


FJ4：N=780（通院中の方）　FJ3：N=881

話せなかった理由

話せなかった経験がある 113 人（FJ4）の理由としては、「自分にとっては重要な内容だが、医療スタッフはそう思っていないと感じるから」が 43.4%（49 人、前回 35.9%から増加）で最多でした。2 位は「医療スタッフの前では『良い患者』を演じてしまうから」38.9%（44 人、前回 39.5%）、3 位は「医療スタッフが忙しそうにしているから」31.0%（35 人、前回 31.1%）です。以下、「聞いてよいか迷うから」「信頼関係ができていないから」がともに 21.2%（24 人）でした。

図 3-5-3　話せなかった理由

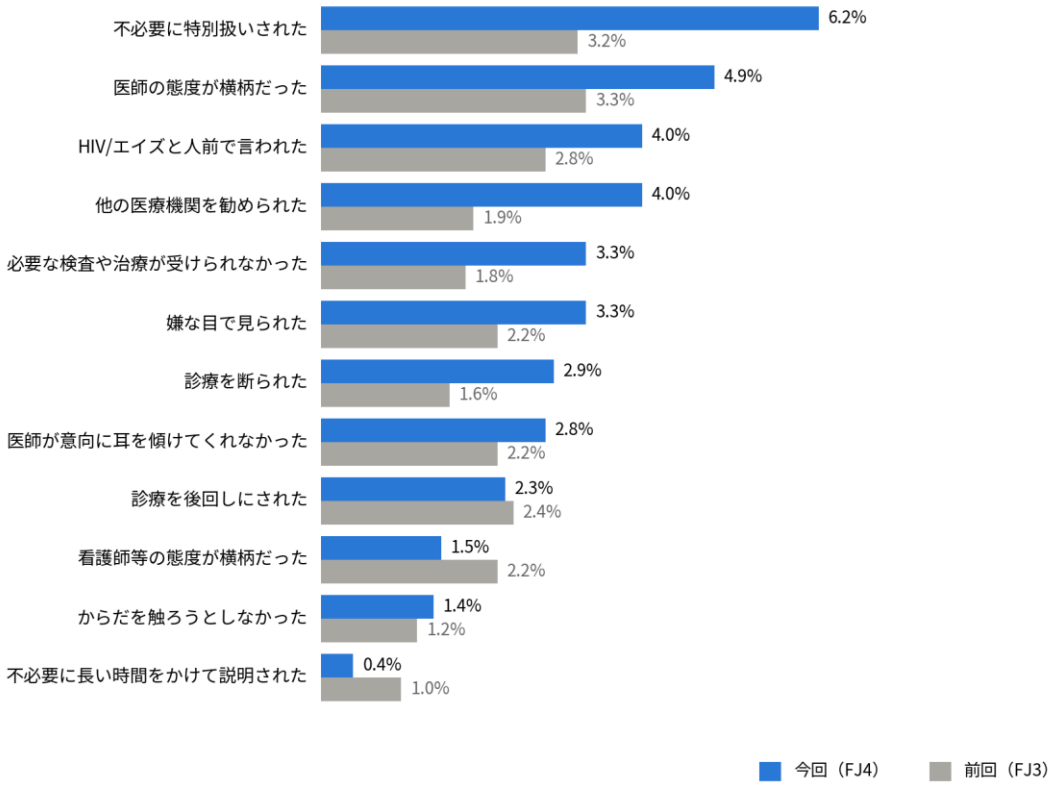


FJ4：N=113（話せなかった経験がある方）　FJ3：N=167　複数回答

■かかりつけ医への HIV 告知・受診拒否・隠す行動

HIV 陽性を伝えたことによる特別な対応の経験については、「特別な対応をされた経験はない」が 81.9%（639 人）で最多でしたが、前回 FJ3 の 85.4%（752 人）から 3.5 ポイント減少しています。否定的な経験として、「不必要に特別扱いされた」6.2%（48 人、前回 3.2%)、「医師の態度が横柄だった」4.9%（38 人、前回 3.3%）などが増加傾向にあり、引き続き注視が必要です。

図 3-6-1　HIV 陽性を伝えたことによる特別な対応の経験

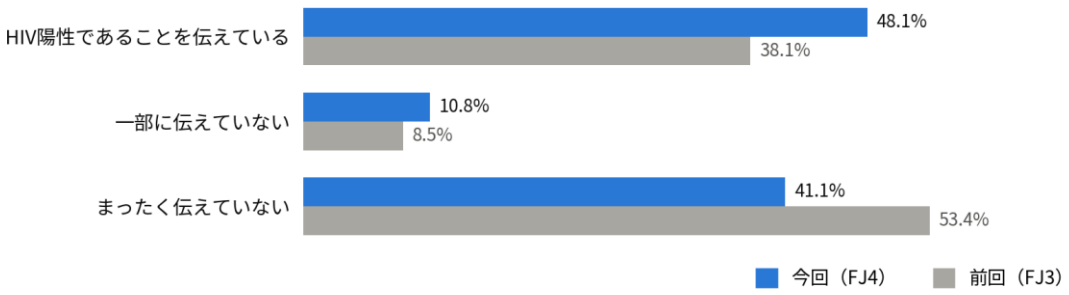


FJ4: N=780（通院中の方）　FJ3: N=881　複数回答（経験なし：81.9%／前回 85.4%）

かかりつけ医への HIV 陽性の告知状況

かかりつけ医がいる 370 人のうち、「HIV 陽性を伝えている」は 48.1%（178 人）で、前回 FJ3 の 38.1%（161 人）から 10 ポイント増加しました。告知率は上昇していますが、拒否や誘導の経験も一定割合で続いており、地域医療機関の HIV への理解促進が引き続き課題です。

図 3-6-2　かかりつけ医への HIV 陽性の告知状況



FJ4：N=370（かかりつけ医がいる方）　FJ3：N=423

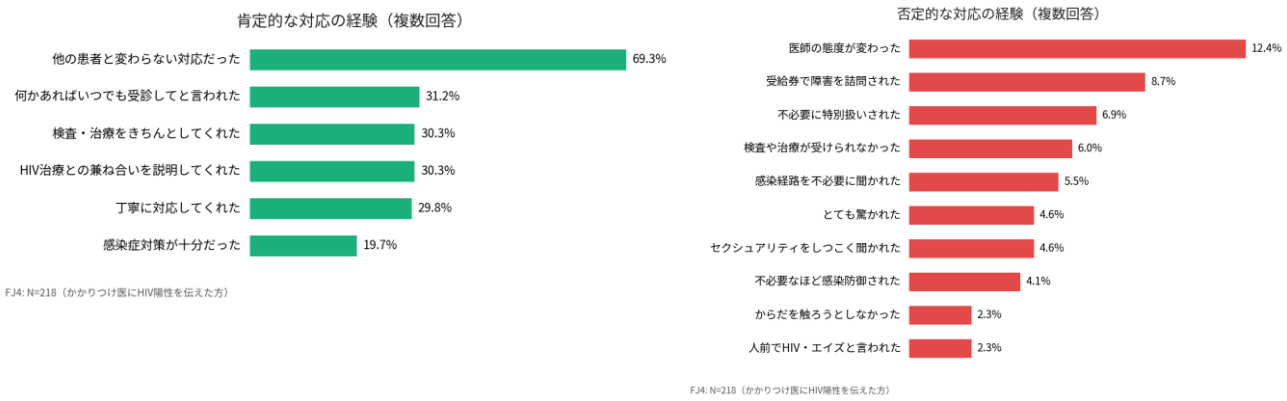
参考

過去 5 年間、HIV 陽性を伝えた後の経験（N=218）	割合	人数
受診を拒否された	11.9%	26 人
他院へ誘導された	11.0%	24 人

かかりつけ医・地域医療機関での経験

HIV 陽性を伝えていた 218 人（一部に伝えている人を含む）のうち 70.6%は特別な対応がなかったと回答しました。肯定的な経験としては「他の患者と変わらない対応だった」69.3%（151 人）が最多で、「何かあればいつでも受診してと言われた」31.2%（68 人）、「検査・治療をきちんとしてくれた」30.3%（66 人）と続きます。一方、否定的な経験として「医師の態度が変わった」12.4%（27 人）、「受給券を見せた際に何の障害かと詰問された」8.7%（19 人）、「不必要に特別扱いされた」6.9%（15 人）などが報告されており、理解ある対応が多い一方で、差別的な対応も一定割合で続いています。

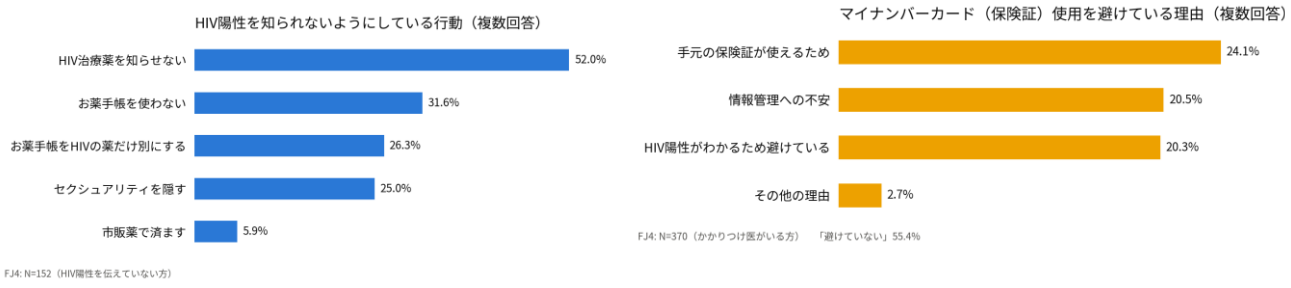
図 3-6-3　かかりつけ医・地域医療機関での経験



HIV 陽性を隠すための行動・マイナンバーカード

HIV 陽性を伝えていない 152 人の行動としては、図 3-6-4 の左図に示すように、「HIV の治療薬については知らせないようにしている」が 52.0%（79 人）で最多、「お薬手帳を使わないようにしている」31.6%（48 人）、「お薬手帳を HIV の薬だけ別にしている」26.3%（40 人）と続きます。また、かかりつけ医がいる 370 人のうち、マイナンバーカード（保険証）の使用を「避けていない」は 55.4%（205 人）にとどまり、約 44%の方が図 3-6-4 の右図に示すように、何らかの理由で使用を避けています。

図 3-6-4　HIV 陽性を隠すための行動・マイナンバーカード

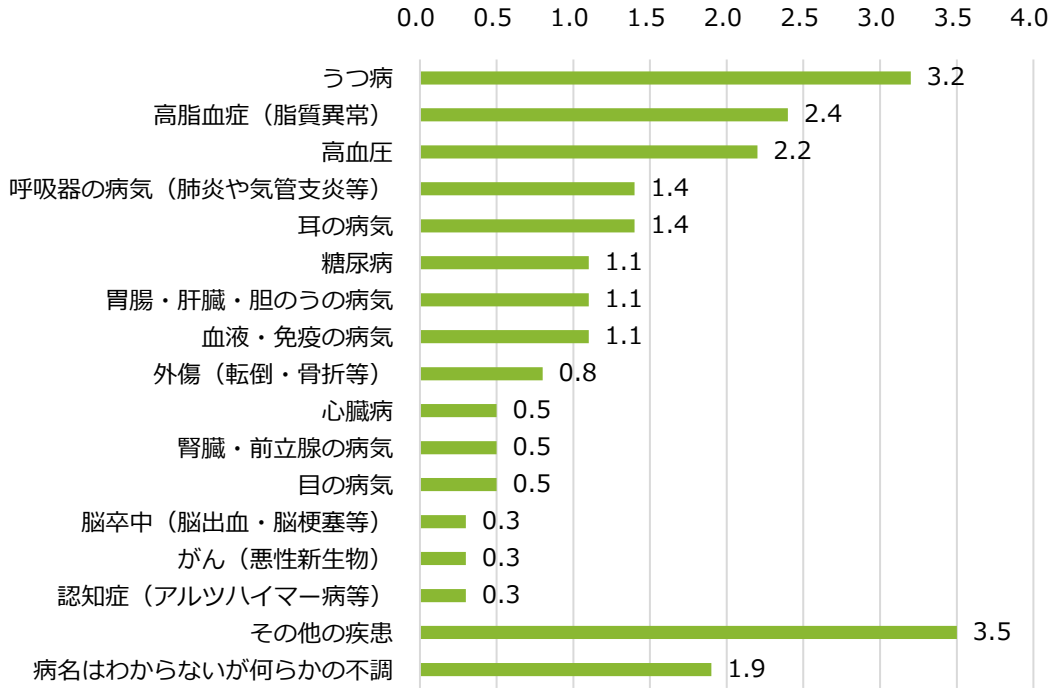


HIV 陽性のため受診をためらい治療できていない病気

かかりつけ医がいる 370 人のうち、「特にない」が 84.1%（311 人）で最多でした。一方、受診をためらっている方として「その他の疾患」3.5%（13 人）、「うつ病」3.2%（12 人）、「高脂血症」2.4%（9 人）などが挙げられています。「その他」の自由記述（N=13）には、歯の治療・虫歯・歯科、いぼ・皮膚のできもの、痔ろう・痔瘻、副鼻腔炎・慢性鼻炎、双極性障害などが含まれ、特に歯科や皮膚科など身近な診療科での受診が

ためらわれている実態がうかがえます。

図 3-6-5　HIV 陽性のため受診をためらい治療できていない病気

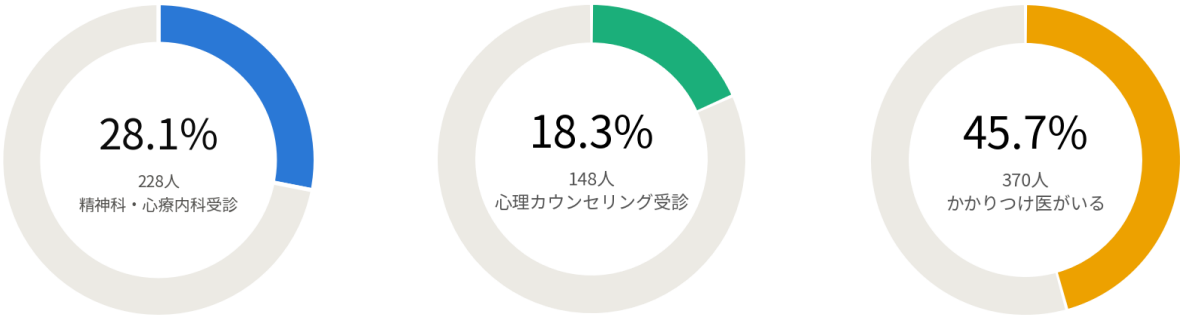


FJ4: N=370（かかりつけ医がいる方）　複数回答（特にない：84.1%）　自由記述 n=13

■精神科受診・カウンセリング受診・かかりつけ医

精神科・心療内科の受診経験（この 1 年間）は 28.1%（228 人）で、前回 FJ3 の 24.3%から 3.8 ポイント増加しています。心理カウンセリングを受けた経験は 18.3%（148 人）、かかりつけ医がいる方は 45.7%（370 人）で、前回 FJ3 の 46.6%（423 人）とほぼ同水準です。

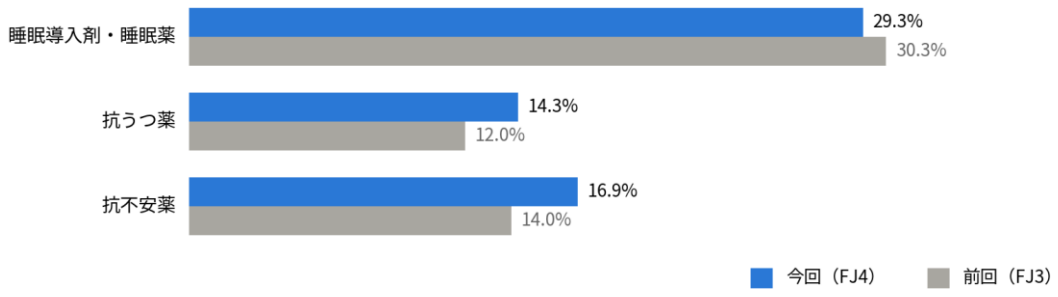
図 3-7-1　精神科受診・カウンセリング受診・かかりつけ医の有無



FJ4: N=810（今回）　精神科・FJ3: N=908（24.3%）　かかりつけ医・FJ3: N=908（46.6%）

精神科関連の薬の服用状況（この 1 年間・複数回答）については、「いずれもない」が 61.5%（498 人）で最多、「睡眠導入剤・睡眠剤」が 29.3%（237 人）で次に多く、「抗不安薬・精神安定薬」16.9%（137 人）、「抗うつ薬」14.3%（116 人）と続きます。精神科受診者の増加は、メンタルヘルスへの関心の高まりや、支援体制の整備によって相談しやすくなってきている可能性があります。

図 3-7-2　精神科関連の薬の服用状況

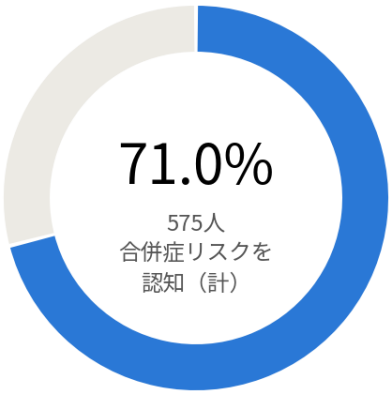


■合併症リスクの認知と取り組み

合併症リスクの認知

合併症リスクが高いことを「よく知っている」19.9%（161 人）、「少し知っている」51.1%（414 人）で、合わせて 71.0%（575 人）が認知しています。前回 FJ3 の約 66%から増加しており、認知度が高まっています。一方、「まったく知らない」は 28.4%（230 人）で、前回の 34.1%から減少はしているものの、約 3 割の方にまだ情報が届いていません。

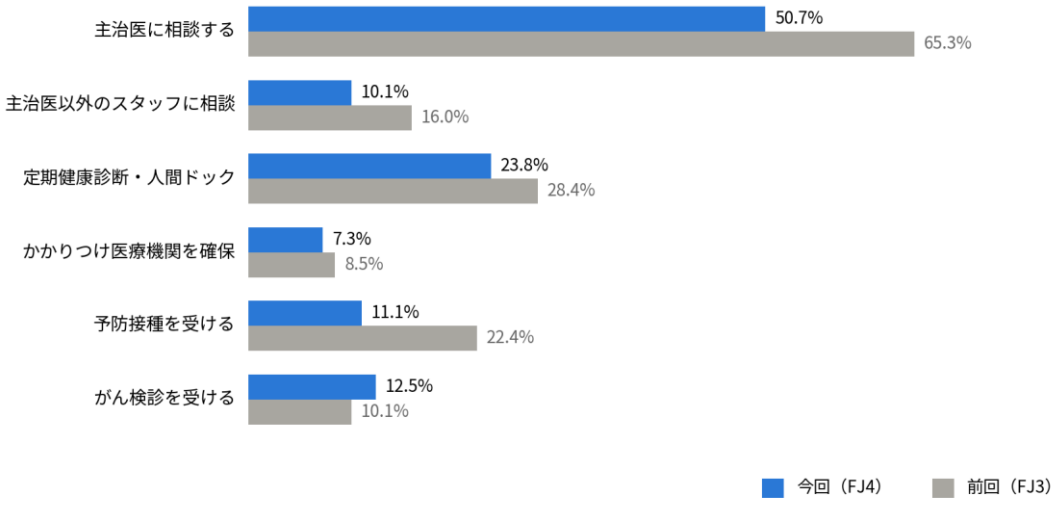
図 3-8-1　合併症リスクの認知



合併症について気をつけていること

合併症について気をつけていること（複数回答）は、「主治医に相談する」50.7%（411 人）が最多ですが、前回の 65.3%から大幅に減少しました。「定期健康診断や人間ドックを受ける」23.8%（193 人）も前回 28.4%から減少し、「特にない」は 33.3%（270 人）と前回 21.9%から大幅に増加しています。主治医への相談や予防接種（今回 11.1%、前回 22.4%）などの具体的な取り組みが全体的に減少している点が課題として注目されます。

図 3-8-2　合併症について気をつけていること

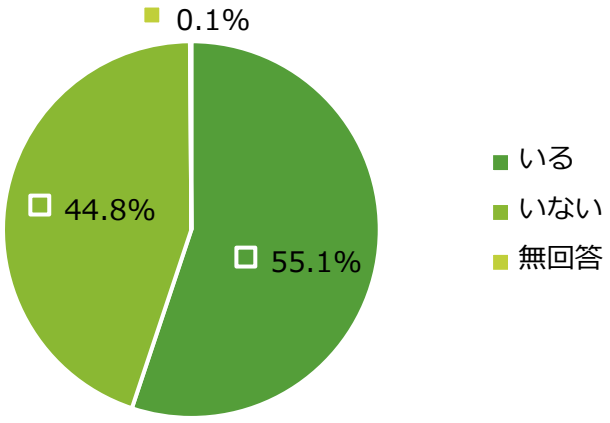


FJ4: N=810（今回・第 4 回）　FJ3: N=908（前回・第 3 回）　複数回答

■かかりつけ歯科医への通院

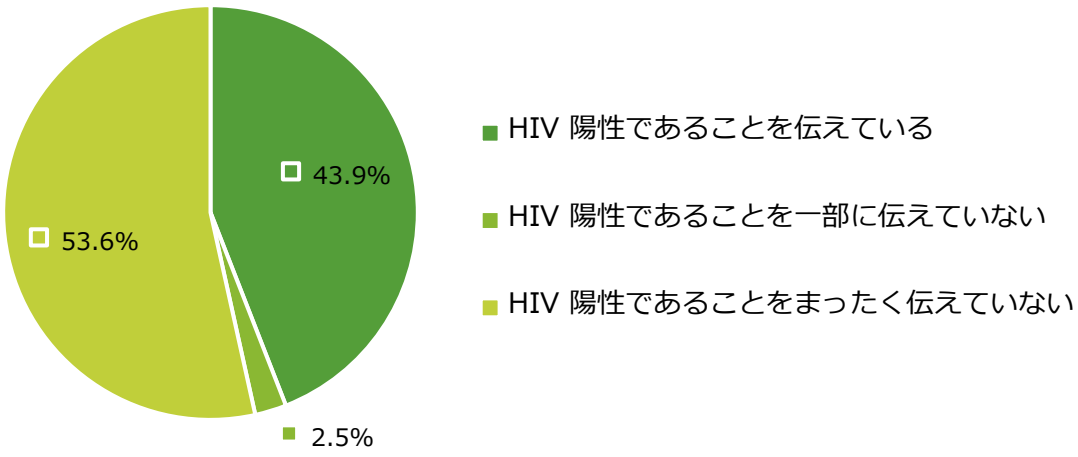
回答者 810 人のうち、地域のかかりつけ歯科医がいる方は 446 人（55.1%）で、いない方は 363 人（44.8%）、無回答 1 人（0.1%）でした（図 3-9）。

図3-9 かかりつけ歯科の有無（N=810）



かかりつけ歯科医がいる方のうち、本設問に回答した 446 人では、かかりつけ歯科医に HIV 陽性であることを「伝えている」方は 196 人（43.9%）、「一部に伝えていない」方は 11 人（2.5%）、「まったく伝えていない」方は 239 人（53.6%）でした（図 3-10）。

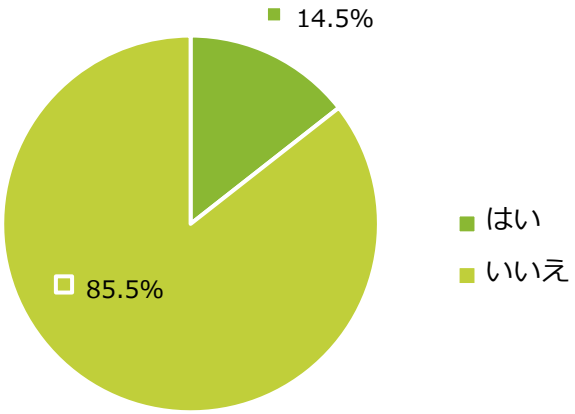
図3-10かかりつけの歯科医には、HIV 陽性であることを伝えていますか（n=446）



■HIV 陽性であることを伝えたことによる歯科受診時の経験

地域のかかりつけ歯科を受診する際に HIV 陽性であることを伝えた方 207 人について、過去 5 年間に「この医療機関では受け入れができない」と受診を断られた経験がある方は 30 人（14.5%）でした（図 3-11）。また、「この医療機関では受け入れができないので、他の医療機関に行くように言われた」経験がある方は 29 人（14.0%）でした（図 3-12）。

図3-11 この医療機関では受け入れができないと、受診を断られた（n=207）



HIV 陽性であることを伝えて受診できた地域のかかりつけ歯科で経験した否定的な対応があった人は 30 人でした（14.5%）。その内訳を見ると、「HIV 陽性と聞いて医師の態度が変わった」が 33.3%と最も多く、次いで「医師や歯科衛生士などが不必要なほど感染防御をしていた」「医師や歯科衛生士などが、わたしのからだを触ろうとしなかった」

「HIV 感染経路は何なのか、不必要に聞いてきた」がそれぞれ 20.0%でした（図 3-13）。

図3-12 この医療機関では受け入れができないので、他の医療機関に行くように言われた（n=207）

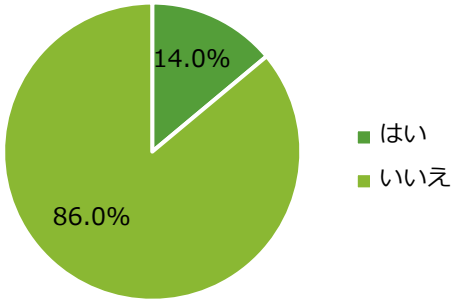
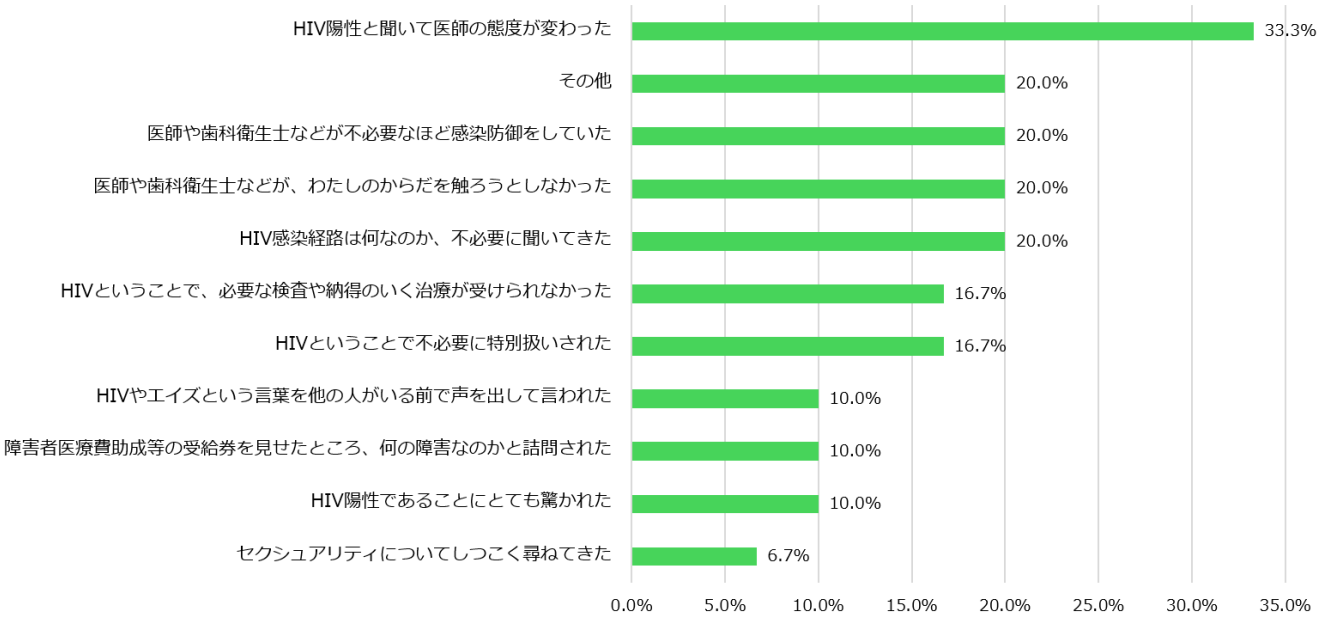
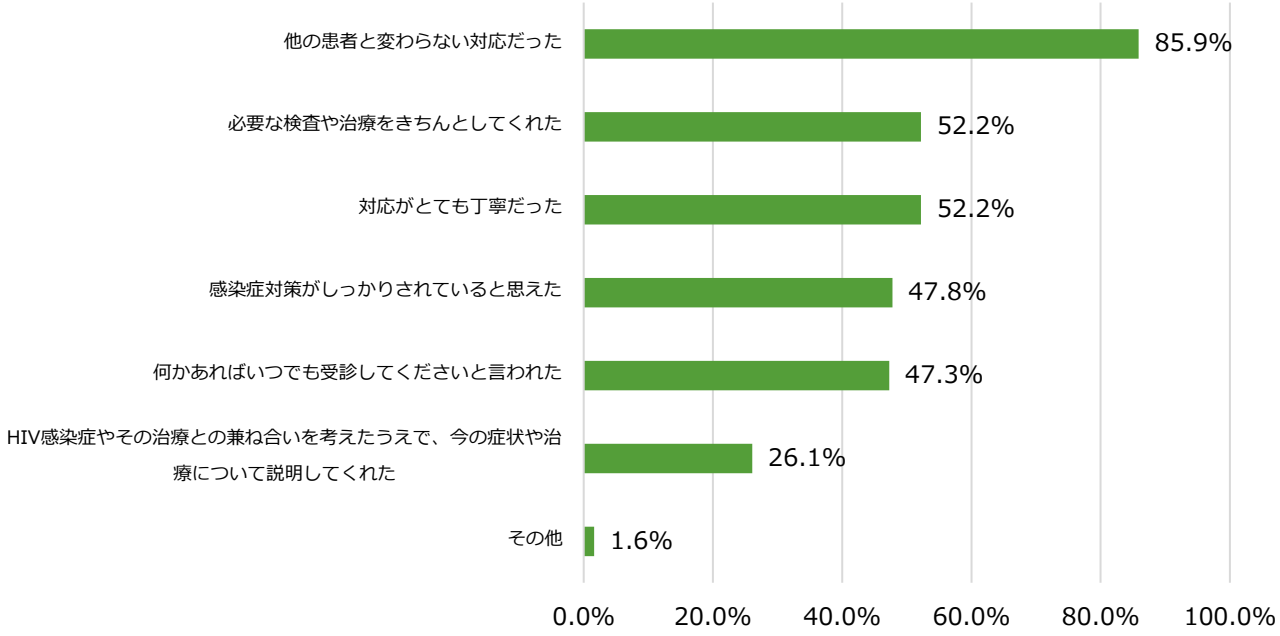


図3-13 受診できた地域のかかりつけの歯科で、ご自身がHIV陽性であることを伝えたことにより受けた否定的な経験（過去５年間, n=30）



一方、HIV 陽性であることを伝えて受診できたかかりつけ歯科での肯定的な経験があった人は 88.9%（184 人）でした。その内訳をみると、「他の患者と変わらない対応だった」が 85.9%と最も多く、「必要な検査や治療をきちんとしてくれた」「対応がとても丁寧だった」がそれぞれ 52.2%でした（図 3-14）。

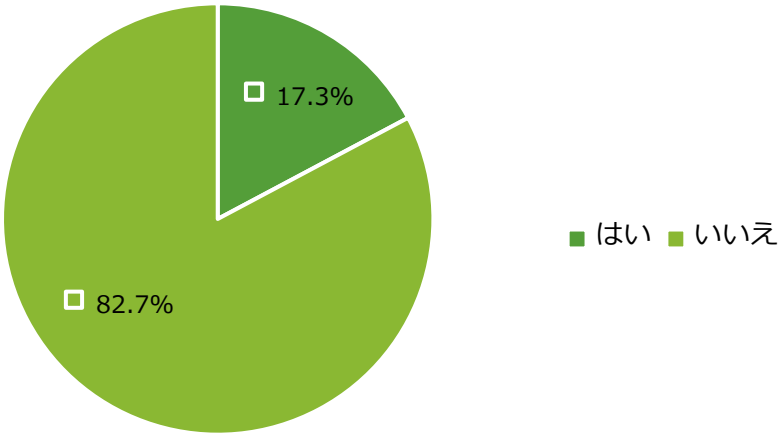
図3-14 HIV陽性であることを伝えて受診できたかかりつけの歯科で、以下のような経験をしたことがあるか（過去５年間の経験）(n=184)



■HIV 陽性であることを伝えることへの躊躇と受診行動

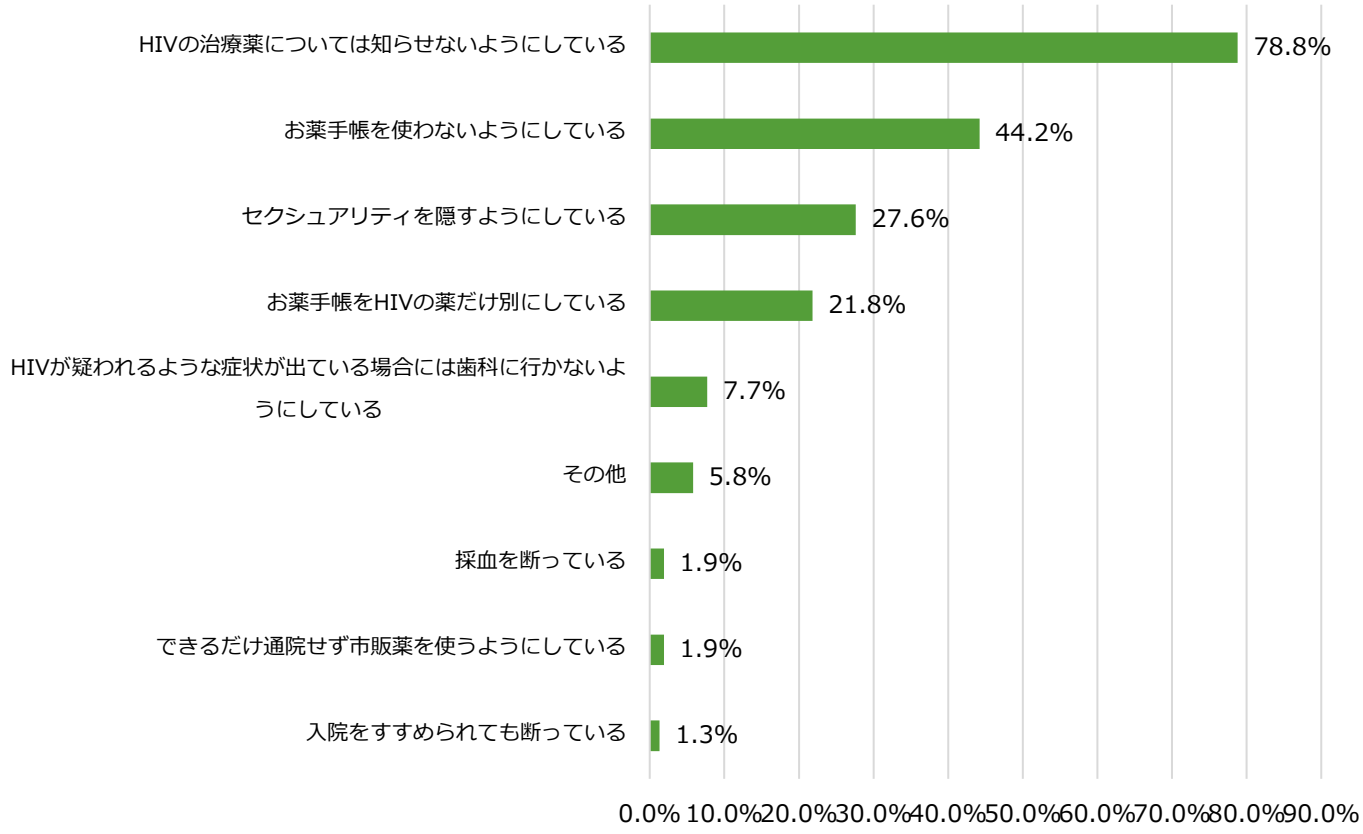
過去 5 年間に、HIV 感染症であることを医療関係者に伝えることを躊躇して、地域の歯科を受診しなかったことがある方は 77 人（17.3%）、ない方は 369 人（82.7%）でした（図 3-15）。

図3-15 過去５年間に、HIV感染症と医療関係者に伝えることを躊躇して、結局地域の歯科を受診しなかった経験（n=446）



また、かかりつけ歯科医に HIV 陽性であることをまったく伝えていない方のうち、HIV 陽性であることを知られないようにふだん行っている工夫を挙げた 156 人中で、「HIV の治療薬については知らせないようにしている」が 78.8%と最も多く、次いで「お薬手帳を使わないようにしている」44.2%、「セクシュアリティを隠すようにしている」27.6%、「お薬手帳を HIV の薬だけ別にしている」21.8%でした（図 3-16）。

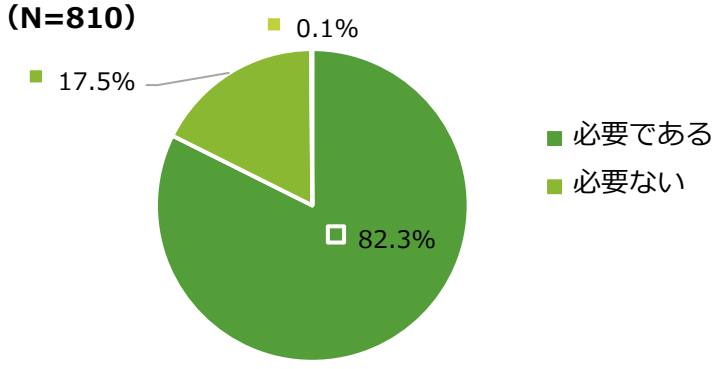
図3-16 かかりつけの歯科医に、自分がHIV陽性であることを知られないようにしている工夫（n=156）



■かかりつけ歯科医の必要性

かかりつけ歯科医が必要かを尋ねたところ、本設問に回答した 810 人のうち、「必要である」は 667 人（82.3%）、「必要ない」は 142 人（17.5%）、無回答 1 人（0.1%）でした（図 3-17）。

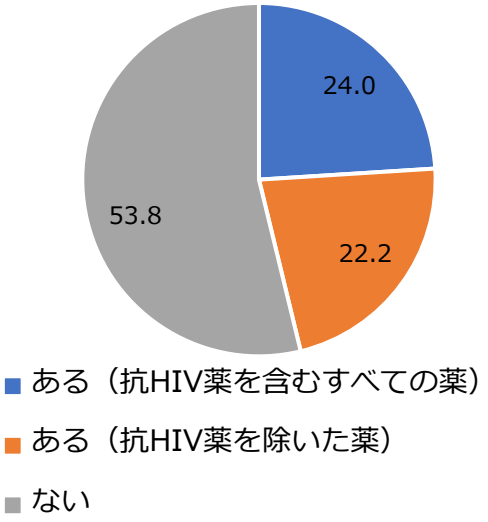
図3-17 かかりつけの歯科医はあなたご自身にとって必要だと思っていますか（N=810）



■かかりつけ薬局の有無

地域のかかりつけ薬局（HIV の薬を院外で処方されていて受け取っている、いわゆる「門前薬局」を除きます）は 46.2%が「ある」と回答していました。「ある」とした人のうち半数強は「抗 HIV 薬を含むすべての薬」についてかかりつけ薬局で受け取っている状況でした（図 3-18）。

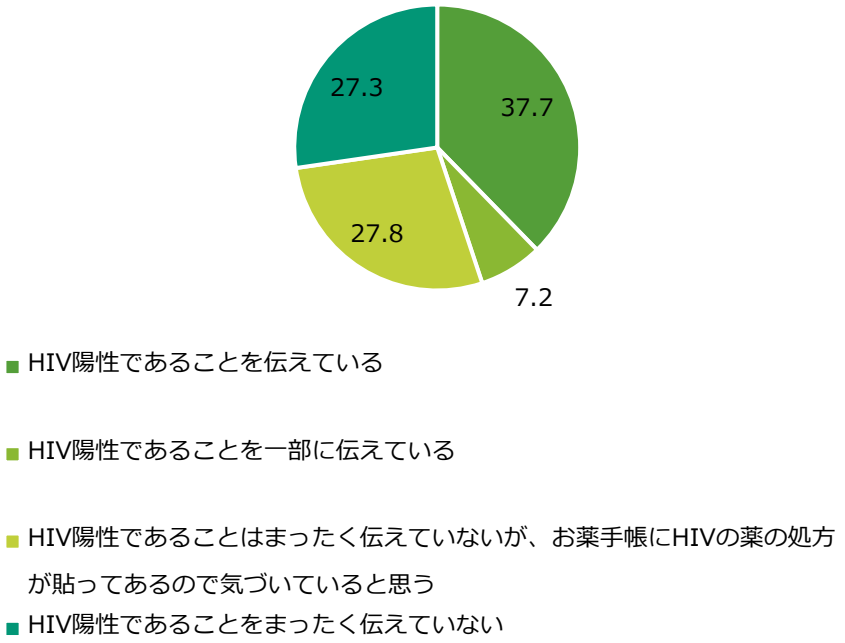
図 3-18 地域のかかりつけ薬局の有無（%, N=810）



■地域のかかりつけ薬局には HIV 陽性であることを伝えているか（n=374）

かかりつけ薬局がある 374 人に限ってみると、HIV 陽性であることを（一部も含め）伝えている人は合わせて 44.9%と、半数弱でした。お薬手帳に HIV の薬の処方が貼ってあるから気づいているだろうという回答も 27.8%ありました（図 3-19）。

図 3-19 かかりつけ薬局に HIV 陽性であることを伝えているか（%, n=374）



■HIV 陽性を伝えたことでの特別な対応（薬局）（n=272）

地域のかかりつけ薬局に HIV 陽性を伝えたり、あるいはお薬手帳の記載から気づいていると思う人に、HIV 陽性ということで特別な対応をされた経験があったか 8 項目でたずねました。その結果、いずれも 1 割未満で、もっとも多いもので「HIV 陽性者であるために嫌な目で見られた」の 5.1%でした。「特別な対応をされた経験はない」は 85.3%でした（表 3-1）。

表 3-1 地域のかかりつけ薬局で HIV 陽性ということで特別な対応をされた経験（n=272）

	%
HIVということで不必要に特別扱いされた	3.7
HIV陽性者であるために嫌な目で見られた	5.1
薬剤師が、私の意向に耳を傾けてくれなかった	4.0
薬剤師などスタッフの態度が横柄だった	4.0
HIVやエイズという言葉を他の人がいる前で声を出して言われた	2.6
不必要と思われるくらい長い時間をかけて説明された	2.2
その他	2.6
特別な対応をされた経験はない	85.3

■マイナンバーカードとお薬手帳

マイナンバーカードをお薬手帳と連動させて使用することができるということを知っている人は 56.7%でした。知っている人 459 人に、連携してマイナンバーカードを使うことを避けているか 4 項目について、複数回答でたずねたところ、「HIV 陽性であることが薬局や医療機関にわかってしまうため避けている」が 39.9%となりました。一方で、避けていない人も 37.0%となりました（表 3-2）。

表 3-2 マイナンバーカードとお薬手帳の連携を避けている理由

	%
HIV陽性であることが薬局や医療機関にわかってしまうため避けている	39.9
現在のお薬手帳のみで十分なので連携させていない	25.7
その他の理由で避けている	3.5
避けていない	37.0

■合併症情報の入手先

合併症の情報をもっとも多く入手しているのはインターネットからで、54.1%でした。医療機関からは 37.0%でした。「その他」としては、エイズ学会の発表、専門誌、論文、このアンケート、友人、知らなかったなどが記載されていました。

図 3-20 合併症情報の入手先（%、N=810）

